

る状態で、おかにあがった魚とまったく同然、空気のおりがたさをしみじみ味わった。

暗夜に乗じてせまいハッチから手送りによる陸あげ作業もなかなか大へんなものだった。

帰路、数人の帰還兵の面倒をみながら無事呉へ入港した。

七月中ごろ呉大空襲のさい、沖あいへ避難潜航したが、敵艦載機による投下爆弾がはれつし、振動と水圧等により艦内照明灯が断線、消灯、プレート鉄板のはねあがり、一部漏水等で生きたこころはなく、ひたすら安全を神仏に祈るのみである。

八月六日広島原爆雲もこの目で眺め、艦内でも気圧の瞬の変化があった記憶がよみがえってくる。八月下旬復員時に、自決用の青酸加里（カプセル）二錠を「日本軍人として恥ないよう、またあやまりのないよう」注意され、持ち帰った記憶も忘れ難いものである。

復員後、艦船引渡しの米軍指示により佐世保港まで回航のため再度召集の命があり、最小限の乗員でふゆう機雷に神経をとがらせながら、鹿兒島沖を通過して目的地

の佐世保に入港した（僚艦の触雷沈没を耳にしている）。

その後数か月、引きわたしまで缶詰状態であった。その間保守任務をおこない、愛艦とわかれを惜しみながら帰郷した。

軍歌と小旗で送られた派手な出征時にくらべ、迎える人影もなく、捨て猫のごとく淋しい実役六年半余の帰還兵であった。

一等輸送艦九号の奮闘

長崎県 宮下政司

弱冠十五歳の身で帝国海軍に志願、昭和十九年二月五日横須賀海軍通信学校に入隊、新兵教育を終え、同校の第四期普通科電測術練習生を六か月で卒業した。同時に派遣中のまま佐世保海兵隊に入団した。

入団するとまもなく、呉海軍工廠で完成間近の一等輸送艦九号に乗組を命ぜられた。非常時とはいえ、諸訓練もほんの数か月で甲板上には重い甲標的（人間魚雷）を

積みこんで南西方面部隊に編入となり、「フィリピン諸島のレイテ島、セブ島、ミンダナオ島カガヤン」の島々へと強行輸送に従事した。

剛毅果断の艦長・赤木少佐をはじめ乗組員一同は、ゆけば再び帰らぬ凄絶必死の決戦場レイテ島へ敵中突破の強行輸送すること八回、このかんに僚艦のあるものは爆撃に、または敵潜・魚雷艇との戦闘、または強行かくざ揚陸にかえらぬ犠牲者多数をかぞえるなかに、本艦だけでも敵機げきつい六機の戦果をあげた。

当時の戦局は我々にとって日々非に向かうばかりで、残された海軍の主力を集め、戦局のばんかいはをはかるべく決戦にいどんだものの、戦艦「武蔵」をはじめ多数の艦船をことごとく失った。

まさにかいめつ状態にいたっているのに、敵前逆上陸をねらった。この作戦は海軍の断末魔のあがきでもあった。第五次の多号作戦において、本艦の航海長・袴田大尉をはじめ砲員、機銃員、各兵科の半数以上の重軽傷のなかに尊い戦死者を出した。この戦において、私も右腕の肘のところで左手中指第一関節部を負傷し、艦内で北

村看護兵曹の下で十五針ほどの治療を受ける。艦体には二百数十個所の弾痕をとどめた。

この戦で私等の部所であるリーダーの導波管が敵機の銃弾により貫通され使用出来なくなった。それでも対空用の十三号電探は健全であったが、私は電信長・亀岡上曹のもとで不馴れな暗号をかいどくしながらマニラの司令部からの着信電報を艦長をはじめ副長、当直将校、機関長と艦内をかけ足でとどけてまわったこともあった。

第九号輸送艦はどのように戦ったであろうか。あの日のあの時の戦いは、本艦で生き残った友がよく銘記されるところ、わが艦なくして駆逐艦「竹」は果たしてマニラ基地帰投ができたであろうか。勇武の「九輪」は語らず、もくして不ごうにはたかかず多くの僚艦や戦友に對し心からの祈りをささげたい。

本艦は艦長以下全乗務員の鉄心一体、よく大任をかんとすいして表彰状を受けること三回。剛毅果断の艦長・赤木毅予備少佐は東京高等商船学校出身で山下比島方面陸軍最高指揮官から恩賞の軍刀を授与されたが、艦隊塗料はポロポロにはげおち、激闘のあともなまなましく、数

か月ぶりに内地に掃投した。

敵の制空権下、全裸身の補給作戦がいかに至難かを語る赤木艦長のつうふんを一億奮起の資に送ろう。

はじめてレイテ島に突入したのは敵が上陸してまもなくだった。その頃、敵機はモロタイ島の基地からB 24、機動部隊からはグラマン艦爆のほかP 38、P 51などどりの編隊で、毎日午前七時半頃の早期来襲をきっかけに、一日に六、七回の定期爆撃を我が揚陸地点付近にあげせかけていた。

その後、敵機の来襲はひん度を増し、ある時など百機をこす大編隊と戦ったこともある。友軍機は船団えんごに飛行機を置くことなど思いもよらず、揚陸作業はいつも上空に敵機の飛ばない真夜中から午前三時ごろまでをえらび、夜明けまでは敵の制空権外にひたいするようにしたが、泊地での作業中にも海上からの魚雷艇とレイテ中央山脈を越えて撃ちこむこんでくる敵の長距離砲に悩まされた。

某月某日、満月の夜を利用して突入したときだった。月は薄霧につつまれ波も割合に静かだった。揚陸作業の妨

害に、敵の大型駆逐艦三隻、魚雷艇三隻がカモテス湾へ北上の電報がはいった。船団護衛の我が駆逐艦「桑」
「竹」の二隻は肉をさらせて骨をさるの伝統の肉薄攻撃でたちまち敵の駆逐艦一隻をごうちん、一隻たいは、魚雷艇二隻ごうちんの戦果をあげた。しかし一番艦「桑」はついにかえらなかつた。この護衛艦隊の犠牲的勇戦と撃沈されて行く敵艦の大火柱、ぐれんのほのほ、輸送部隊の全員は護衛艦の勇戦をむだにするなど決死で揚陸を終了した。

第二次、第三次の決死の輸送突入のたびごとに、敵機の来襲はげきれつとなり、艦の犠牲は増していく。泊地でも航行中でも一定数以上の編隊をみたら敵機と思えというさんれつな状況下に、レイテの戦況は日ごとにしれつになつていく。

トウモロコシや芋をかじって死闘する前線の将兵が突入した艦にかけよって「荷役が困難なら人と弾丸さえ上陸出来たら必ず勝つ、糧食なんかあとでよい」と後統部隊の到達を待つひつうな戦況を聞いてはふるいたたずにいられない。輸送任務を果たすまで、せめて泊地進入ま

の間だけでも、なぜ飛行機がないのか、飛行機さえあったらと敵機の爆撃によりしずむ僚艦をまのあたりにして、幾度歯ざしりしたことか。

第三次の某月某日のノースアメリカンB25とグラマン二十数機編隊と、第五次の某月某日グラマン五十機との格闘はとくにはげしかった。本艦だけでも三機撃墜したが、敵もゆうかんで艦におおいかぶさるように低空で突っこんできた。爆弾でふきあげる水柱、砲員、機銃員がバタバタと倒れて行く。砲員全滅とみるや、ただちに他の甲板員が飛びついて撃ちまくり敵機をげきたいした。

戦やんで舷側五メートルに受けた至近弾が、巻きあげた水しぶきに洗われた。甲板に立って「これで甲板あらいの世話がはぶけた」とささやく兵員のこうたんさには乗艦していた陸軍の精銳も舌をまいた。

その後は南西方面部隊司令部の命によりマニラを脱出。佐世保に入港するやまもなく、呉に回航し海軍工廠にて応急修理をすませ、横須賀鎮守府部隊に編入せらる。以後終戦まで単艦行動で、小笠原方面艇身輸送任務

に従事す。内地にきとうして艦長、機関長のこうたいあり、また二十年六月某日父島二見港への輸送任務は成功したものの、横須賀むけ出港まもなく敵機に発見され猛烈な対空戦闘になり、敵機群との一騎討ちで人と飛行機との血みどろの戦いであった。

この時の戦闘においても戦死者二十九人、重軽傷者七十人という尊い犠牲者をだしてしまった。そのなかには私と同じ配置にいた若い同年兵もいた。こうして小笠原方面の艇身輸送も十数回は任務に成功したのである。終戦まで抜群の功績をおさめた艦で、戦後も復員輸送に従事した比類なき艦であった。

(資料) 記事の一部は昭和二十年一月二十八日朝日新聞西部本社掲載のもので、第九号輸送艦三代目航海長厚海大尉を通じて入手したもの。